

令和5年度 千葉県道徳教育懇談会会議録

日 時 令和5年11月16日(木)
午後1時40分～午後4時00分
会 場 浦安市立明海南小学校

1 受付

2 授業参観

3 懇談

(1) 開会

(2) 県教育委員会挨拶

(3) 委員紹介

(4) 県事業説明

ア 千葉県道徳教育懇談会のこれまでの経緯について

イ 千葉県の道徳教育について

(ア) 千葉県道徳教育推進のための基本的な方針に基づく県の取組

(イ) 令和4年度道徳教育推進状況調査結果から

(5) 協議(懇談)

ア 授業参観について

(柴田委員)

クラスの人数が25人位で適した人数。発言しやすい雰囲気が良かった。40人いると発言を拾うのが大変。教科書を使って授業をしており、全体の前で発言をする場面、2人組で発言する場面があり、全員が発言していた。子供の意見に気付かされることが多く、自分自身が勉強になった。自己対話のプリントで授業内容を振り返り、「自分で本当にできるのか。」という問い直しは素晴らしい。

(坂本委員)

教室が綺麗。授業が始まる前に汚れがあるところを掃除していたのが印象的だった。命の大切さを考えさせる内容だったが、先生の話全員がしっかり聞いていたので授業が成立していた。子供たちの抽象的な考えを先生が掘り下げていた。命は大切に深いものなので、どんな結論を出すのかと思って参観していた。道徳は、主人公の立場で考える場面が多いが、医者、犬の立場など、周りの登場人物の立場になって考えていたのは良かった。

(長束委員)

教科「道徳」の授業を見るのは初めて。命の大切さを真正面からとらえて真剣に考えることができている。高校では道徳を倫理や公共でも取り扱う。高校で同じような授業をするのは難しいが、小中学校と同じように授業するのではなく、生徒同士の意見の対立などにより活発な話し合いができるはず。小中学校で学んできたことを生かし、教科を含め、教育活動全体で道徳教育を行っていききたい。

(小林委員)

教室が整然としていて、教室の前に余計な刺激物がない。集中しやすい環境。子供たちが自分事として考えられるように発問の工夫がされていた。子供たちは前半緊張していたが、後半

ワークシートを用いてからは発言する児童が多かった。もう少し時間があれば、さらに深まりがあったのではないかと。

(小高委員)

小学校6年ということで中学生に近い。「命を大切に。」というテーマを最初に先生が板書して、子供たちに伝えた。テーマを後で伝える方法もあるが、どちらが良いのかは分からない。先生が道徳の指導に慣れており、発問の仕方が上手。子供たちが何を書いているのかをきちんと見て指名していた。前半、緊張して発言が出にくいときは先生が上手に誘導し、子供たちから引き出していた。ワークシートの問題が少し多かったのではないかと。中学校でも尊厳死の題材があり、意見は分かれるが、どの意見からも命を大切にしているということがわかった。教科書に沿って授業を行うほかに、子供たちの考えを揺さぶるという方法もある。

(新城委員)

議論する道徳だったかという課題はある。本校の児童の特徴として、学力が高く、良いことは書けるが、否定されると傷つきやすい。そのような児童たちが、自分の意見を出し、どのように道徳的な考えを深めていくのが本校の課題である。この何年間かコロナでグループ討議ができなかった。本来は3、4年生で行う。若い教員はグループ討議の経験が浅い。道徳の授業についてはクラスをローテーションして行っているので何回か同じ授業をしている。

(大森委員)

幼稚園の児童と違って子供たちは静かに聞いていた。子供たちは初めて聞く話をきちんと理解していて、先生と子供たちとの関係が良いと感じた。幼稚園でも、子供同士で疑問に思っていることを言う場面はあるが、子供同士の話し合いは幼稚園の発達段階では難しい。子供同士で答えがでなくても議論はして欲しい。

(澤田委員)

今日の授業は発達段階にふさわしい内容だった。14歳くらいになると本音を出さない。小学校では、真っ白いよいことを、児童自身の中に落とさせることが大切。中学校は、「本当にそうなのか。」「実際はどうなのか。」そこまで考えさせることが大切。葛藤などグレーの部分が出てくる。それが高校に繋がる。道徳の授業で、テーマを最初に示すかは発達段階による。議論するときには発問数が多いと、授業の時間が足りなくなる。

イ 研究指定校の取組状況について

(澤田委員)

千葉県では、特色ある道徳教育推進校を指定し、各校で道徳教育の研究をしている。本日は、その学校の代表の方々が出席しているので自校の取組状況を伺いたい。

(長束委員)

本校の研究主題は「デジタルシチズンシップの理解から実践」。今1、2学年がタブレットやスマートフォンを通常の授業で活用している。ICT活用を考えたときに、情報モラルという形で、してはいけないことを学ぶことが多いが、本校の場合は通常の授業で使用していることもあり、ICTをどう活用するかということで今回の主題が出てきた。本校のスクール・ポリシーである「自らの可能性を発揮し多様な他者と協働しながら、持続可能なより良い社会の創り手として社会に貢献し、幸福な人生を切り拓く。」は千葉県の高校の道徳教育の目標と合致している。総合学科の産業社会の授業ではキャリア教育やSDGsを扱っている。7月に講師を招いてデジタルシチズンシップについて職員研修を行った。ICT活用を制限するのではなく責任

をもって使わせていくという内容だった。本校教員の約3割がICTを活用して授業を行っている。今年度は、デジタルシチズンシップの概要を理解し、パブリックとプライベートとの違いを考え、ネット上でどう上手く会話をするのかということテーマに公開授業を行った。クラスの枠を超え学年で40グループを作り、そのグループ内でネット上で話し合いをした。学校行事で投票するときにICTを活用しているが、生徒たちはすぐに結論を出したがる。話し合いの技術がないように感じているので、そこを何とかしたい。

(小林委員)

本年度は職員研修を行い、次年度の準備期間として捉えている。道徳の研究とは別に、昨年度から主体的・対話的で深い学びの授業作りに取り組んでいる。その取組を道徳教育に繋げるために準備をしている。夏季休業中に千葉大学教育学部の細川かおり先生を招いて、「知的障害 特別支援学校の道徳教育 特別の教科「道徳」の授業作りを考える」というテーマで研修を行った。障害の程度も様々であるので、一人一人の教育的ニーズを踏まえ、障害特性を理解した上で、子供たちにとって分かりやすく、腑に落ち、没頭できる授業ができるようにしていきたい。

(小高委員)

千葉県の特徴ある道徳教育推進校に指定される前に、市の方で道徳教育の研究をしていた。本校の生徒は、やさしく思いやりがあり、それらは当たり前価値観として持っているが、友達同士の関係作りが苦手。仲良くしているようでトラブルが起こることもある。自分事として考え、主体的に議論して、本音が言える人間関係を目指している。道徳の授業に関しては、発問の仕方などを工夫し、心を揺さぶり、問題を自分事として捉えることが大切。考え、議論するというのを難しく考えないで、そういった場面を多く作っていきたい。道徳の授業で、きりりノートという副教材があり、そこに自分の気持ちを書き込み、後で振り返りができるようにしている。付箋アプリを使い、電子黒板に自分の考えを表示したり、こころのパロメータアプリを使い、こころの動きが分かるようにして、子供たちに分かりやすく、視覚的に訴えている。道徳の授業だけでなく、身の回りの問題を掲示物として示し、そこに自分の考えを付箋に書き貼っていく取組をしている。例えば、「学校の周りにゴミが多い。」という問題を掲示し、学校で何ができるかということで、ゴミ拾いという声が生徒から出てきた。また、「学校周辺の花壇を管理していた方が高齢で、自分で管理するのが難しくなってきた。」という問題に対しては、本校の生徒たちは自分たちで管理したいということで実際に行っている。

(新城委員)

こども園・小・中連携で道徳教育をしている。相互理解・寛容、レジリエンス、Wellbeingな関係の醸成をキーワードとし、それぞれ研究主題を設定している。令和9年度に小学校の校舎に特別支援学校が設置される。令和7年度に小学校も中学校の校舎に移る。道徳だけでなく、小中の連携をどうしていくかが課題。中学校の教員と道徳について話をしている。小学校、中学校が同じ教材、同じ教室で授業をする。ゴールを意識して教員は取り組んでいる。変容をどうまとめていくか。アンケートの蓄積などを考えている。1年生の見守りをしているボランティアの方に道徳の授業をしてもらい、みんなに支えられていることを学んだ。その後、あいさつを元気にしてくれるなど、子供たちの行動が変わった。地域の人達とも関わっている。

(大森委員)

「自分を好きになる」をテーマに研究をしている。幼児教育においては道徳教育のための教科書はないので、教育要領、就学前の10の姿を参考にしながら小学校への接続を意識し、道

徳教育の計画を考えている。「かけがえのない自分」、「支え合う喜び」にスポットを当て、実践事例の検討を行っている。3、4、5歳での発達段階に応じた教育を行う必要がある。3歳は生活を中心に、絵本、紙芝居を活用して学ぶ。4歳は経験差が出てくる。知っていてもできない部分もあるので教師がモデルを示す必要がある。5歳は実体験を取り上げて、話し合う機会をつくる。このような取組を考えている。感動体験や人に聞いてもらえたという経験から、心が動き、それが強みになって、伝え合う喜びに繋がっていくので、そこも踏まえていきたい。心が満たされていることをどう評価していくかが課題。

ウ 道徳教育充実のための県への要望

(坂本委員)

タブレットなどは使い方を間違えると大変だけど、あると便利。情報モラルやリテラシー教育が大切。生徒、保護者、学校、先生がつながりをもち問題意識を共有していきたい。他者との関係、友達との関係づくりなど、道徳は繋がりが必要だと思う。その繋がりの最初は家庭にある。家庭における繋がりが基盤となって学校の先生に色々な角度から教わるのが大切。子供たちが先生に投げかける言葉が母親に言うような言葉になっており、公私が区別できていない場合がある。保護者としては思うところがある。家庭では読み聞かせで語感を養うなどの教育を行い、小学校、中学校では共同生活の中で仲間とどう過ごすか、そして高校でそれを花開かせるのが親の責任だと思う。

(柴田委員)

道徳の教科化で子供や教師は変わったのか。道徳の好き嫌いに関しては、道徳の教科化の前と比べ嫌いになっているというデータがある。道徳が好きになるという視点を大切にして、対策をしていって欲しい。自分自身も部活指導をしてきたが、部活を好きになってもらうことを意識していた。そうすると後は自分たちから動いてくれる。道徳も同じではないか。そのような視点を持って欲しい。どのような立場の人が道徳推進教師をやっているのか調べて欲しい。経験の浅い教員が道徳推進教師の場合だと先輩に言いにくい場面もあるのではないかな。ある程度の立場の人にやってもらうのも一つでは。教科書がマイナーチェンジ、デジタル化しているが、指導書は高く購入できない。デジタル教材を買うお金がない。結局、読み中心の指導になってしまう。予算も必要である。研修は方法論も大切だが、教師の持つ倫理観、道徳性、人間性だったり、その部分の研修が必要。考えが人と違ったり、道徳性の低い子もいる。みんながその子を叩いてしまうとそこで潰れてしまう。議論してつぶされる。他の意見も認めることも必要。道徳の免許はないが、全ての先生が行うものなので研修を充実させて欲しい。

(澤田委員)

人間は悲観的である方が実は進化している。先々を心配して、教育でも心配が先にくる。道徳教育はブレーキをかけるイメージがある。道徳教育は心の教育で、ブレーキだけでなくアクセルも必要であり、そのバランスが大切。人間の素晴らしさを忘れてはいけない。道徳教育はしてはいけないこと、自己管理の方向になりがちだが、夢とか希望を語り、元気を出せる道徳であって欲しい。県には情報発信をしてもらいたい。不登校、自死が増える状況を改善しなくてはならない。人とつながる楽しさ、喜びを伝えていくということを大切にしてほしい。

(6) 閉会